
皇位継承者アドル＝クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

殲滅天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇位継承者アドル＝クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・

ファブレ

【ISBNコード】

978-4-903605

【あらすじ】

『テイルズオブバーサス』（アビスルート。ただし、色々なキャラ出てくる）と、『イース？』の、超無理矢理コラボです。キャラ入れ替えしてみました。

序（前書き）

とりあえずキャラ入れ替えの説明。

今のところ分かつてゐるのを書いたけど、まだ増える可能性あり。
書いてないキャラは入れ替えなしのキャラ。

『テイルズオブ』シリーズの世界

ルーク アドル

ガイ ドギ

ティア（グラント）

ティア（ティアルナ）

ナタリア

アイシャ

アッシュ ガッシュ

ガイアス

ヴァン サイアス

『イース?』の世界

アドル ルーク

ドギ ガイ

ティア（ティアルナ）

ティア（グラント）

アイシャ ナタリア

ガッシュ アッシュ

サイアス リグレット

ラウド ゼロス

ガッシュの精霊たち マオ、ヴェイグ、ジーニアス

超無理矢理だけど、読んでくれると嬉しいな

序

この小説は、「イースVIII」と「テイルズオブ」シリーズ（主にアビス？）を無理やり組み合わせたものです（――――）

こういうのが苦手な方は読まない方がいいと思いますよ。

まだ見ている方は、覚悟ができた方だけですね？
やめておくなら今のうちですよ？

それでは、今度こそ行きます

「ふわ」

赤毛の冒険家、アドル＝クリステインは、いつもと同じように田
見めた。

しかし何かがおかしい。直感的にそう思つたアドルは、窓から外を見た。

「……？」

アルタゴに行くために船旅をしていたのだから、外の景色は海以外にはあり得ない。そもそも、船には窓などないはずだ。

さらに、自分の服まで変わっている。
下は黒いズボン、そして服は白く膝まで届く長袖で半袖、その服の下にも黒の半袖を着ている。
そこまではいいが。

「どうしては、は、腹が……」

そう、その服は、腹が出る形だったのだ。

「あああどうしよう……こんなのドギに見られたら……笑われるよー」

その時、部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

「あつはつは！アドル、もう遅いぜ。……腹出し服も意外に似合つじやねえか」

「え、本当……ああよかつたよ……ん？よく見ると、ドギも服変じやないか。それに、なんか痩せたかい？しかも、剣なんか持つてどうしたんだい？」

ドギと言われた青毛の青年は、ワイシャツに山吹のような色のベストを着て、茶色のグローブを着けている。そしてスラッシュスを穿いていて、腰から剣を下げている。そんな彼の武器は拳なので、剣を下げる必要はない。

「おお、そうなんだ。似合つつか？」

「似合わないと思うな」

ドギが落ち込んだのは、言つまでもない。
その時、ドアがノックされた。

「ルーク、ガイ。朝からうるさいですよー」

ドアが開き、一人が知らない男が顔を出した。背中まである栗毛、

銀縁メガネで軍服を着ている。

アドルとドギは顔を見合せた。

「ルーク……？」

「ガイ……？」

『誰のことだい（だ）？』

その男は、二人の磁きに気づかないようで、
「おや？ ルーク、いつ髪を切ったんです？ それにガイも、髪を青く
しちゃいましたかー。ぶっちゃけ、似合っていませんよ？」
ドギがさらに落ち込んだのは……言つまでもない。

「あのー……僕はルークじゃなくて、アドル＝クリステインっていう
んだ。そして、こっちの青毛なのは僕の相棒ドギ」
アドルは、自分たちのことを説明し始めた。軍服の男が、誤解し
ているようだつたから。

「そうだつたんですか、これは失礼。しかし、どうしてルークやガ
イの服を着ているんでしょうね……ん？ あなたたちは、昨夜まで何を
していたんです？ というか、どこから来ました？」

アドルたちは昨夜まで、アルタゴを目指して船旅をしていたことを
話した。

「アルタゴ……聞いたことのない地名ですねえ……。……まさか……

「いえ、もしかするとあるかもしませんねー……」

「あー……僕たちにも分かるように説明してくれないかい？」

アドルが言うと、男は物思いにふけるのをやめ、

「これは失礼。実は、私の世界には、新月の日に、異世界とつなが
るだろう、という言い伝えがあるんですよ。……申し遅れましたが、
私、ジェイド・カーティスという者です」

男、ジェイドはようやく自分の名前を告げた。

それからしばらく、アドル、ドギ、ジェイドは自分たちの世界に
ついてなど話し込み、最終的に。

「おー一方とも、剣術…ああ、ドギは拳ですね…に優れているようですが、私たちの旅についてきてください。もしかすると、二人が戻る方法も見つかるかもしれないですし」

『うわ、適當だな』

「何か言いましたー?」

『いえ、何も』

ひつして、アドルたちはともに旅に出ることになった。

「ふわ～…シグルーン、朝～はんできた？」

「んー…マヤ、おはよ～…」

『……あれ？』

アドルたちがジエイドと旅することを決めたその頃、他の部屋で何かが起きていた。

「…はつ！貴女は、もしかして…公主アイシャさまですか…！？」

アイシャと呼ばれた少女は、驚いて目の前の少女の顔を見る。

「ええ、そうよ。あなたはもしかして、街で花を売っている…？」

「ティアです。覚えていてくださいたんですね」

「だつて、あなたこの前ラウドに絡まれていたから。そんなことより…不思議な服ね」

「え…？きやあつー何これ！」

ティアは驚いて自分の服を見た。いつものワンピースにストールでは無く、大きく立っている襟のついた茶色の長いワンピースのよな服（裾の方が花のよう大きくなっている）に、これまた茶色のブーツに二の腕まである手甲といった出で立ちだ。

そんなティアの格好を見てアイシャは。

「…なんで同じくらいの年の子と、こんなに胸の大きさが違うのよーつー何よ、この大きさ！不平等じゃないつー！」

「…え？」

そんなアイシャは、白と明るいミントグリーンの服を着て、黄色のタイをつけている。下は、裾を折ったショーパン、白のブーツだ。頭には、茶色のヘアバンドがついている。

「ほり、あたしのなんか、見なさいよー…。バストの部分がけつこう余るのー！」

「！」、公女さま！何をおっしゃるんですか！」

「…あつ。シグルーンに聞かれたら怒られるじゃない…」

「いや、ツインテールにヘアバンドの方がおかしいかと…」

「そつちなの！？…あ、そうだティア。その…敬語なんかやめてよね。きっと、何かの縁でこうやって一緒になつたんだからさ」

「ですが…いえ、それもそうですね」

「ほら、敬語出た」

「あつ…その、よろしくね、アイシャ…ちゃん」

「『アイシャちゃん』かあ…まあ、しばらくなはそれで許してあげるわ」

アイシャが言つたその時、部屋のドアが音を立てた。

「ティア、ナタリア。そろそろ朝食ですよー」

『……ナタリア？』

その言葉の後、一人の男 ジョイドが入つて來た。

「…おや。貴女方、ティアとナタリアではありますね？…どこのどなたですか？」

ティアとアイシャは、自分たちについて説明した。

「わたしはティアですが…貴方の『ティアさん』とは別人だと思います」

「あたしはアイシャよ。一人ともアルタゴ公国アルタゴ市に住んでるわ」

「なるほど、アルタゴですか…アドル、ドギの目的地じゃないですか」

「アドルに…ドギですか…！」

アイシャは驚いて言つた。

「その一人つて…」

『赤毛のアドル』と、『壁砕きのドギ』よ…！」

「あの一人、貴女方の世界では、かなりの有名人だったんですか

「あの一人…？」

「あたしたちの世界……？」

「おーい、ジエイド～。何やつてんだ～？」

ティアとアイシャが不思議がつてていると、もう一人、男がやつて来た。ドギだ。

「ドギ～。この剣ちゃんと持つてくれよーー部屋が散らかつて困つてゐんだよ」

もう一人来た。こちらは、アドルだ。

「あ、あ、あ、アドル＝クリステイン！？」

「え…僕のことを知つてゐるのかい？確かに、僕はアドル＝クリステインだけど…。君たちは？」

「あたしは、アイシャ・サリ…じゃなくて、ただのアイシャよ。アルタゴに住んでいるわ」

「ティアです。あの、あなたがアドルさんといつことは、そちらの青毛の大きな方は…『壁砕きのドギ』さんですか？」

ドギは笑つて答えた。

「やうだぜ。コイツの…アドルの相棒だ」

「なるほど～。つまり、アイシャとティアもアドルやドギと同じ世界から飛ばされたんですね。となると…」

「僕たちの代わりに、もともとこの世界にいた人たちが、僕たちの世界に飛ばされたんだね」

「察しがよくて助かります。残りの方は、思い付か」

「し、失礼ね…！あたしだつてちょっとは思い付いたわよ…！」

ジエイドの発言に、アイシャは反論した。ちなみに、残り三人は苦笑した。

「それは失礼…ああ、そうだ。私たちの旅についてきませんか？あなたの方の世界に戻る方法も分かるかもしれませんし、私としても人手がほしいですから」

「だったら…」

「行きます」

いつして、アイシャとトライアもジニアドについて行くことになつた。

「ああ、あの男と一緒になのか……」

序？（前書き）

イースの世界の舞台は？の舞台・アルタゴ公国、テイルズの世界の舞台はテイルズオブバーサスの舞台・ダイランティアです。

アドルたちが別世界に飛ばされた頃、別の者たちもまた飛ばされた。

「ルーク、起きるー！」

「……うるせえな、俺はまだ眠いんだよ……」

「ヴァンとの稽古はいいのか？」

「……！」

ルークと呼ばれた少年は、あわてて起きた。

「ガイか……って、なんだ、その格好」

「いや、ルークの格好も変だろ」

「……は？」

ルークとガイは、それぞれ自分の服を見た。昨夜、寝る前まで着ていた服とは違う服を着ている。ルークは普段着ていない銀の鎧（銀色に限らず、普段から着ていなが）を着ているし、ガイもタンクトップにズボンといういつもよりかなりラフなかつこうになっている。

「何だ、これ……どうなつてんだよ！？」

「……！」

ガイは何かに気付いたのか、突然部屋を飛び出した。

「なつ、おい、ガイ！？」

ルークも部屋を飛び出した。

「これは……どうなつてんだ……？」

ガイは部屋を飛び出して周りの様子を確認した。そうしていると、甲板に出た。辺り一面海だ。しかし、昨晩街の宿に泊まつたため、こんなところにいるはずがない。

「……な、なんで海なんだあー？おー、ガイ！！昨日、俺達、宿に泊まつたよな！？」

「……確かに、宿に泊まつたよな……ジハイドの旦那が、俺達をわざわざ海に運ぶなんてめんどくさいことをするはずがなーいし……」「じゃあ、なんでこんな所にいるんだよー？」

「アドル、ドギ。朝からうるせえぞ」

その時、船の中から男が出て來た。

「アドル？ドギ？誰だ？俺はファブレ公じゃ」

「ルーク！！」

ガイが、名乗らつとしたルークを極力小さくした声で止める。二人はひそひそ声で話し始める。

「なんだよー！」

「こちいぢ『公爵の息子』とか名乗るなー！もし命を狙われでもし

たらどうするー！」

「うつ……わ、わーつたよー！」

「何話してんだ？……って、おめえいらよへ見たら、アドルヒドギじゃねえな。どこのどこつだ？」

「なー！」

「……ルーク」

何か文句を言おうとしたルークを遮り、ガイは説明を始めた。しかし。

「俺はガイ・セシル、こいつはルーク・フォン・ファブレだ。俺たちは、ニーズホッグにある街の宿に泊まつたはずなんだが……」

「ニーズホッグ？そりや、地名か？」

「ああ、地名だ。ダイランティアの……」

「ダイランティア？何だそりや？」

「？？？」

全く話が通じない。

「……じゃあ、ここは……？」

「ここはメドー海の……アルタゴ公国付近の沖だな。お前ら……じやねえ、アドルとドギット奴がそこに行こうとしてたんだ。そういうや、あいつらがここに行つたんだ？」

そう言つて、男は中に戻つた。

ここまでの状況を説明しよう。

昨日までダイランティアの四大国の一、新帝国ニーズホッグにある街の宿に泊まつたルーク達。ルークとガイ以外にも、ティアやジエイド、アニス、アッシュなどといった仲間がいたはずだが、どこに行つたのだろうか。

そして、今朝起きてみると、街の宿（陸上）にいたはずのルーク達は海上の船にいることに気付き、今に至る。

「……うーん、これはもしかして……いや、あり得るな……」

「おい、どうしたんだ？」

「ルーク、昨日、月は出てたか？」

「何言つてんだ？ 昨日は新月だったじゃねえか」

ガイは、ルークの言葉を聞いて、自分の推測に確信を持つた。

「やつぱりか……」

「なんなんだよ、新月がどうしたんだよ？」

「新月の夜に別の世界につながることがある。……って言つて伝え、聞いたことないか？」

「あるに決まつて……って、嘘だろ！？」つちも昨日新月だったのか！？」

「お前ら、何をまた一人で……。そういうや、さつきの話を忘れてたが、俺はラドック、海賊だ」

中から、男…ラドックが再び出て来た。

「海賊！？俺はそんな汚い奴らと一緒に乗つてたのか！？」

「嫌なら降りるか？周りは海だから、ついでに体も洗えるわ」

「な……」

「ルーク、頼むから余計なことを言わないでくれ……で、ラドック。一つ聞きたいことがあるんだが、いいか？」

ガイは、昨日新月だったかどうか聞いた。こちから、アルタ「」も新月だったようだ。

「うわあ、やっぱりか……。こちには、新月に関する言ひ伝えがあるのか？」

ラドックは、『どこかの世界と新月が重なった日、『訪問者』が来る』とこいつの話をしてくれた。

「ということは……こちの世界の“訪問者”が俺達つてことになるのか。そういえば、探してた奴はいたのか？」

「いや、いなかつた。船から降りたつてことは、あり得ないしなあ……」

「……そいつらが、俺達の代わりにダイランティアに行つたんじゃねえの？」

しばらぐ、ただ聞いているだけだったルークが口をはさんだ。

「！ そりゃ、あいつらとお前らが入れ替わったのか……」

ルークは黙つて聞いているだけだったのがイヤで口をはさんでみたのだが、その適当に言つてみた一言がラドックを納得させたらしい。

「やっぱりそうだったか。ありがとよ、ルーク。お前のおかげでこの謎が解けたよ」

「なつ、べつ、別に、お前の疑問を解決するために言つたんじゃねえぞ！ 適当に言つてみただけだ、そこんとこ勘違いすんじやねえ！」

そう言つと、ルークは船の中に戻ってしまった。

「……ありや、何だ？」

「ただの照れ隠しだな。まったく、アイツも素直じゃないな」

「ああ、なるほどな」

そんな話をしていると、船の中に戻ったはずのルークが再び出て来た。

「……ガイ！ 部屋の位置どこだ！？」

ルークは、船の中で迷子になつたようだ。

それから1、2時間すると、船はアルタゴに着いた。

序？（後書き）

次回から、アドル＆ドギ、ルーク＆ガイそれぞれの冒険が始まります。

第1話 - 1 (前書き)

まずはアドル側から。

「ダイランティア 新帝国（一ズホツグ）

「……つまり、この世界・ダイランティアの四大国の代表選手シケルスが集まつて戦うのが、ユグドラシルバトル。で、本来選手だつたルークさん、ガイさん、ティアさん、ナタリアさんの代わりが、僕達（ルーカス）ですね？」

とある街の宿。アドル、ドギ、ティア、アイシャは朝ごはんを食べながらジエイドの説明を聞いていた。4人を代表してアドルが確認する。

「はい。そうです。いやあ、物分かりがいい人達で助かりました。」「はわわっ、イケメンで頭がよくて… アニスちゃんどうしよう、王子様はルーク様つて決めてたけど、アドル様もいいなあ、アニスちゃん困っちゃう（／＼／＼）」

一緒に食べていた茶髪、茶色の目、褐色の肌をもつツインテールの少女が悶え始めた。彼女の名前はアニス・タトリン。人形を使って戦う人形士（バベッタ）だ。ちなみに、けつこう腹黒だ。

「アニス？ちょっと黙つてくださいね」

「はあい」

「…………（絶句）」「」「」

アドル、ドギ、ティア、アイシャは、手つ取り早く「う」とイースメンバーは揃つて絶句した。

「あ、あー、どうもありがとう。（かなり棒読み）」「アドルさん、わざわざ反応してやらないでいいんですよ。」「む、大佐ってば酷いです～」

「あ、ジエイドさん、『さん』と敬語はいりません。」

「そうですか。では、他の3人も呼び捨てにしますが…いいですか、ドギ、ティア、アイシャ？」

「「おう（いい）ですよ。」」

「いいわ。許してあげるわ、ジエイド」

「…大佐をいきなり呼び捨て…ワガママ公女？」

「誰がワガママよ…？」

「あんただよ」

アーニス、黒い部分が出ている。

「アーニス。公主さまをワガママ呼ばせたりするのはどうかと思こます

「はーい」

アドル、ドギ、ティアの3人は固まつた。

「何なんだ、コイツ…」

「アイシャも、いちいち言こ返さないでくださいね」「…わかつたわ」

「そういえばアーニス、アッシュとヴァンはどうしました？」

「まだ寝てるんじゃないですかあ？」

「そうですか。では、見に行つて来ますよ」

ジエイドは席を立つた。ジエイドがないということは、アイシヤ・ルニアースの争い（？）を止められる者がいないということである。

「…………」

今2人は無言だが、しかし火花が散っている。

「あの、2人とも…………」

「今食事中…………」

アドルとドギが仲裁しようとするが、あまり効果はない。

「アイシヤちゃん、アースちゃん、これから一緒に行動するんだから、2人とも少しは仲良くしてね？」

「……………？」

ティアが二二二二しながら止めに入る。二二二二しているはずなのに、ティアの後ろから何か黒いモノが見える。

ティアの仲裁（脅し？）は、かなり効果があつたようだ。

「あ……じめんなさい」

先に謝ったのは、アイシヤ。

「はつ……あ、あたしも悪かったよ……アドル様のお近くにいるのが気に食わないけど……」

「えつ、僕？」

「そうなの？……なら、なんか面白そうだから、あなたの恋応援してあげるわ」

「わあい、いいんですかあ？」

アニースは喜ぶ。つてか、態度変わりすぎだろ b yodagi

「……え、僕の意思是無視なの！？」

「おや？アニースにアイシャ。いつの間にそんなに仲良くなつたんですか？」

「あつ、大佐」

その時、ジェイドが2人の男を連れて戻つて來た。

「あれ、その人達…誰ですかあ？ヴァン奏長とアッシュの服着てますけど、別人ですよねえ？」

アニースの言う通り、ヴァンとアッシュの服を着ている彼らは、彼ら本人ではない。

「あつ、お前、ガッシュ！？」

「サイアスさん（千竜長）！？」

「このお一人もお知り合いでしたか」

「ああ、お人好しか」

「これは、公主殿下。このような場所でお目にかかるとは。そして、ティア。元気にしてたか？」

「はい。マヤも元気……だと思います」

「はわわっ、アドル様だけじゃなく、サイアス様、ガッシュ様もかっこいい……アイシャ、あんたの世界つて、何でこんなにイケメンが多いの！？」

「ドギ、残念だつたな。お前はかつこよくないつてよ」

「うつせえ。つてかガッシュ、お前、その服着たら、ただの魔王w

W

「うん。まさか、知り合いがラスボスになるとは思わなかつた」

ガッシュは、いつもの服ではなく、アッシュの服 黒に赤の意匠の服 を着ている。それで黒髪だから、とても黒い。

「つるせえ。……それで、そのガキと青髪、なんかす」「ワガママ そうなツインテールは誰なんだ？ロン毛眼鏡がジェイド、そこのです ました野郎がサイアスなのは分かつたが、……」「ぶーっ！—ガキじゃないです、あたしはアニス・タトリンですう！」

「誰がワガママかっ！—あたしはアイシャ・サリ……じゃない、アイシャよ…」

「おや、ロン毛眼鏡とは、酷い言い草ですねえ…」

「すました……野郎……」

「サイアスさんはそんな人じやないです！つて、わたしの説明だけ やたら短くないですか！？」

ガッシュの言った5人の特徴に、5人が一斉に文句を言つ。

「じゃあ、青のロン毛少女」

「どつかのマンガのタイトルみたいに言わないでください…わたしば、ティアです」

これで、いよいよ全員が名乗ると、アドルが予定を聞いた。

「あの、ジハイドさん。今日はどうするんですか？」
「アドル、貴方もさん付けと敬語はいりませんよ。…ナビ!!コウ」

ジハイドはナビ!!コウを呼ぶ。

「はいですの」

ジヒイドが呼ぶと、薄い水色の小動物が出てきた。袋状の耳と手足は薄い水色だが、顔と腹は白い。

「「かつ、可愛い……」」

アイシヤ、ティアは田を輝かせ、

「…………（むにむにむにむに）」

アニスはナビリコウの頬をむにむにし始め、

「…………（びよーん）」

ガツシユは耳で遊び始め、

「…………（なでなで）」

サイアスは頭を撫で始めた。

「おや、脚わん、ナビリコウが氣に入ったみたいですね」

「みゅつ、みゅううう。耳は痛いですの……」

「第2の非常食……」

「みゅつ……」

「おいおいアドル。そいつはピッカーデじやないんだぞ（笑）」

「うん。不味そう」

「失礼ですの……」コウは不味くないですの……」

「（ニヤリ）なら、いつか料理してやんよ……」

「アドル。いなくなるのは困るんで食べないでくださいね」

アドルは文句を言う。

「えー……」

「もうよーーいんに可憐いのに、食べたりしたら可哀想じやない

ג ניירם

ティアモアイシャに加勢するが、

「食べ物くらいなら、わたしがお持ち帰りしてねごぐるみにします
テイクアウト

「 ち ょ つ と 待 て ー い ！ ！ ！

6人に止められた。

「……アドルもティアも、ユグドラシルバトルの間は手を出さないでくださいね」

卷二

「ただし、終わつたら、煮るなり焼くなり好きにしていいですよ」

「ナガラニ」

怖がいたナマリナリジナミシテヨ。

「それで、最初のフラッグはどこにありますか?」

「みゅううう……ボクの命の危機なのに、酷いですの。……最初のフ
ラッグは……帝都ニーブヘイムですの」
「それじゃ、行きますよ」

8人 + ナビミコウは宿を出た。

第1話 - 1 (後書き)

次は、ルーク側行きます。イース?やりたいなあ…

第1話 - 2 (前書き)

ルークは少し丸くなっています。

→アルタゴ市・港

「ああ、ソニーがアルタゴだぜ」

ラドックの言葉で、ルークとガイは船を降りる。

「ほつ……なかなか綺麗な町だな。さて、音機関はあるかな……つと
「こんな所に音機関なんかあるわけねえだろ」

それからガイがラドックに礼を言い、ルークとガイはアルタゴ市
内に入つていつた。

「あー、あー」

広場でまだ小さな女の子が花を売つてゐるよつだ。『よつだ』と
表現が曖昧なのは、女の子が全く言葉を喋らないからだ。

「なんだあ？」

「花を売つてゐるのか？ 一つ買つていい」

「つて言つても、この世界の金なんかあるのか？」

「そうか、ガルドじや払えないか……。……お？」

ガイが財布から小銭を出すと、出てきたのは……

「…………なんで？」

ガルドではなかった。

「あ、これはもしかして…この世界の通貨に変わったのか？」

ガイは試しに、その小銭で払つてみた。どれを出せばいいか分からぬいため、女子に見せてみると、『5』と書かれた小銭を持つていた。

「…あ…」

その女子はルークの赤毛をじっと見る。

「…俺か？」

そしてルークの後ろに回ると、

「 痛つてえええええ…！」

髪の毛を引っ張つた。

「んー？」

女子は、ルークが叫んだのが面白かったのか、さりげなく引っ張る。ルーク、若干涙目。

「痛えつつつてんだろ…離せこのクソガキ…！」

「…ふえつ…」

ルークに怒鳴られ、女子は泣きそうになる。

「……う、つ……」

「はあ……。ルーク、いきなり女子に怒鳴るわけじゃない。……このお兄さんの赤毛が気になつたのか?」

「……（じへじへ）」

女の子はうなずいた。そしてまたルークの髪に手を伸ばす。今度はそつと撫でる。しかし撫でるだけではなかつた。

「（にぱーつ）」

そして、ガイの方を向いてにっこり笑う。ルークの髪は一本の三つ編みになり、所々に花も編み込んである。一方、居心地悪そうにしていたルークは全く気付いていないようだ。

「ちょっ……ルーク…ふつ、くくく…お嬢ちゃんも、上手いな…」
「おい、ガイ、どうし…………」
「んー？」

女の子は、ルークが突然黙つた訳が分からなによつだ。

その数分後、アルタゴ市に『赤い髪の魔女』が現れたという話は、後に都市伝説になつたとかならないとか。

それから街を一通り歩き回り、もとの広場に帰つてくると、先ほど花を売つていた女子と、ルークとガイがよく知る少女がいた。

「「……ティア！？」

少女の名前はティア・グランツ。ルーク達と旅をしていたが、彼

女も飛ばされたのだろうか。

そして、長い赤毛の青年がティアに絡んでいる。

「なあなあティアちゃん。オレサマひついて来なよ～

「お断りさせてもらひうわ」

「そんなこと言つてゐるはどうじやあ、コレあげるつて言つても、来
ない～？」

やう言つて出したのは、ピッカーチーと云つ茶色の小動物だ。

「か、可愛い……」

「うー」

頬を紅潮させたティアの服を、女の子が不機嫌そうに引っ張る。

「……はつ。」「めんなさこ、ママ。……ゼロスさん、貴方のお願いは
聞けないわ」

女の子はママ、赤毛はゼロスといつらじい。

「なんだよ～、このオレサマのお願いが聞けないっての～？」
離れて見てくるルークはイライラしている。

「なんだよ、あのゼロスって奴！～ティアにあんなに近づいて…」

「おつ、焼きもちか？」

「ばつ、おまつ、何バカな」と言つてんだよ～！誰があんな冷血女

「うー」

とか言いつつ、ティア達の方に走るルーク。

「てめえらーーー何やつてんだよーーー?」

「ルーキー!?」

「なんか余計な野郎が来たよ……つて、ティアちゃんの知り合い！」

「ルーケーに、ガイ!?」

「ハーハハハ」

「やねーからなー！そーで騒がれてると迷惑だから来ただけだからなーからが甚遠いぢやねーぞ！」お前が心配だから来た話

ルークがベタなツンデレを出すと、ゼロスの部下が言つ。

貴様：この方をどなたと心得る！？ロマン帝国の無敵艦隊を撃破したゼロス千竜長だぞ！！」

卷之二

「ルーカ。この人達に言つても無駄よ」「むっ…！」

ティアの言葉で、部下は更に煽られたようだ。

貴様ら……その無礼の数々により、全員まとめて牢屋送りだつ！

!

おいおい……いくら何でもそれは酷いんじゃねーの？」

ゼロスは言ったが、部下に言い負かされた。ルーク、ガイ、ティ

アはゼロス達に連れて行かれた

ティアはマヤを猫可愛がりしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9360s/>

皇位継承者アドル＝クリスティンと赤毛の冒険家ルーク・フォン・ファブレ

2011年11月17日21時24分発行